

しよううつしあさがおばなし 生写朝顔話

〔解 説〕天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。司馬芝叟の長話（小説）を元に、山田案山子が創作、後に萃松園が添補潤色。全五段の時代物です。各地の名所を織り込み、運命に翻弄される男女と、お家騒動などの伏線を張った筋立ては変化に富み、箏歌を取り入れて音楽的にも特徴ある作品になっています。

〔ここまでのあらすじ〕宮城阿曾次郎は京で芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪と恋に落ちますが、鎌倉出張の命を受け、別れ際に朝顔の歌を扇に書いて深雪に渡します。急に本国へ引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然にも阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、再び離ればなれとなってしまいます。国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡され、駒沢が実は宮城阿曾次郎であることを知らない深雪は、阿曾次郎恋しさに家出してしまいます。放浪の末、辛苦から深雪は盲目となり、三味線とともに唄を歌って日々をしのいでいました。深雪を捜す乳母浅香と出会うものの、浅香は悪漢のため命を落としてしまいます。

〔あらすじ〕一方、駒沢次郎左衛門は、国元に戻る途中、同僚岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は悪人の一味で、駒沢を亡き者にしようとか萩野祐仙に命じてしびれ薬をもろうとしますが、宿屋の亭主徳右衛門が発見、笑い薬と取りかえられて事なきを得ます。

笑ひ薬の段

こそは入りにける。後に祐仙一人笑み

「味いぞく。当座の褒美がまず十両。さらばこれから薬のしかけ」

といひつゝあたり見廻して、件の薬を湯の中へそつとほりこみ、蓋びつしやり

「かうして置いて駒沢が戻り次第にふり立てゝ、われらが先へ服加減、解薬の力でしゝらしん。駒沢めは忽ちにぐにやくくくと薬の効能。こいつはよつ程えいくくうまいわくくく」

と悦び勇むそのところへ、奥よりいきせき下女お鍋

「申しく奥のお客がお待ちかね。早うく」

とせり立つる。声にびつくり祐仙は、そしらぬ顔で

「エヘン」

奥に入る。始終窺ふ徳右衛門一間を出でて後打眺め

「最前から聞いてゐれば、なにやら怪しいあの薬。駒

沢様へ申し上げようか。イヤく、それでは却つて当り障り。どうぞよい思案がありさうなものぢやが。

「フ、ソレくきのふ浜松で買うて置いた笑ひ薬。この湯をかへて、フ、さうじゃく。かうして置いてまさかの時は、オツトよしく」

と心でうなづき徳右衛門、勝手へこそは入りにけり。はや夕暮の忙しく、膳部の運ぶ寝道具を間毎く燈す灯の、きらを飾りて立帰る。駒沢二郎左衛門春雄、旅中ながらも武士の行儀くづさぬ羽織野袴、家来引連れ打ち通る。待ちまうけたる岩代多喜太、一間のうちより歩み出で

「これはく駒沢氏。ことのほかお早いお帰り。シテ要用は相済みましたか」

「なるほど、殿様御帰国先触れの手筈、庄屋代官に申

し付け、思はぬ延引さぞお待兼ね」

「なんの／＼。旅草臥のおいとひなく、宿々のかけひき、イヤモ御苦勞に存じます。エ、拙者もなにがなと存ずるところへ、国元にて昵懇じっこんの医者、萩の祐仙と申す者。当宿に泊り合はせ、先刻はからず対面いたせしに、此奴ことのほか茶好きにて、道中にては茶箱を持参し、相樂しみをとること。貴殿にもお好きの道なんと一服飲んでおやりなされまいか」

「ハ、アそれは風流なる心がけ。しかしわれも人も旅草臥、所望いたすもなんとやら」

「ハテサテ、いらぬ御遠慮。薄茶一服所望いたせばとて、彼も好きの道でござれば、なんの草臥をいとひませう。ひらに／＼一服おつきあひ下されい」

とおのがたくみの押付けわざ無理にすゝむるそのところへ、一間を出づる萩の祐仙、茶箱携へ心に笑み、

悟られまじと空とぼけ

「これは／＼岩代様」

「ヲ、祐仙老。先刻は久々に積る話し」

「シテあなた様は」

「ヲ、これなるは、その節お噂申した駒沢氏。文学武芸はいふに及ばず、なに一つ抜目はなけれど、イヤモ生得御遠慮深いお人。されども元来の茶の道には御執心。ヤ幸ひこれに白湯もたぎりある、先刻話のナ、ソレ薄茶一服所望だ／＼」

「へ、これは／＼、なか／＼あなた方へ上げますやうな茶ではござりませねど、御所望とは身の面目。苦しからずば何服なりと、召上られ下されう」

と追従たらだら立上り、茶箱取出し毒薬の、たくみの裏流かゝれしとも、知らぬ手前のしかつべらしく、振立てゝ差し出せば、岩代多喜太詞を正し

「イザ駒沢氏」

と取次ぐところへ

「やまづくくく暫く」

と徳右衛門

「恐れながら」

と座敷に出で

「憚りながら旦那様。いかゞわしい申しごとながら、譜代お出入りの殿様の、御家来たるあなた方。私方で煮焚きの物はこの度に限らず、吟味に吟味をいたした上差上げませねば、千に一つ粗相がござりましては、この徳右衛門めが落度。泊り合はせしあなたのお茶、サ、御如才のあらうやはなけれど、めったには、大、申し」

と、目顔で知らせば、岩代多喜太

「ヤアいらざるうぬがかばひ立て。身が昵懇の萩の祐

仙。毒薬でも仕込みあるうかと、疑うての申し条か」

「ア、イヤくく全くさやうでは」

「ム、しからばなにゆる差止めた。駒沢殿の手前といひ、今一言いつて見よ。真二つに打放す」

ときつぱ廻せば、祐仙押しめ

「ア、イヤまづくくくくくくお待ちなされ。貴公

様の御立腹は御尤もなれども、徳右衛門の申すところもまた一理あり。ヤナニかういたさう。下拙めが毒見仕り、駒沢様へ差上げませう。なんと徳右衛門、それでいひ分はあるまいな」

「イヤモウ御自分にお毒見なさるゝ程、たしかなことばござりませぬ」

「ヲ、さうあらうく。その代り、なにごともない時は、その分では済まさぬが合点か」

「イヤモ、それは是非に及びませぬ。御存分になりま

はんくく。笑はんといふたら、ドッコイ身も萩の

せぬ」

祐仙。これでも医者でござる。憚りながら、寛怠ながら、恐れながら、ドッコイ笑わんぞ、笑はんといふたら笑わんくくく、ア、くるしいアハ、ハハハ

と力みかへれば、びっくりしながら、手を合しても止まらぬ笑ひ

くくくコリヤ亭主く、このあたりに医者はないか。

「ア、めつさうなくくく、ハア、ハ、御、オホ、く、御了簡な、アハ、ハ、ハ」

医者は。医者が医者を頼むは、どうかかう卑怯なやうなれど、ホ、ホ、ホ、同商売は相互ひぢやアハ、ハ、ハ。

と詫ぶる詞もあやちなく、笑ひ薬の利目とも、知らぬ祐仙息はずませ、転けつ笑ひつ

ア、息がはずむ、これがく笑ひ癩とでもいふものかい。イヒ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、ア、たまらぬく、

「ウフ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ」

ハ、ハ、臍が、裂けるわい、アハ、ハ、ハ、ハ」とすり替えた薬とは、いざ知らず、果ては茶箱も踏み散らし笑

逃げてゆく。案に相違の岩代はあきれ果てたる仏頂顔「エ、さまさまの馬鹿者にかゝり、湯に入るを忘れていた。ヤイ亭主め。うぬよく邪魔をイヤサきりく

ひ入るこそ正体なき、姿にあきれ岩代多喜太、はかり戎屋徳右衛門、おかしき隠すばかりなり。短気の岩代

風呂場へ、案内ひろげ」

ぐつとせきあげ

と、それとも得いはずむしゃくしゃ腹、席を蹴立て、廊下口。後に心を奥の間の、わが座敷へと、駒沢も座

「ヤアおほだはけの萩の祐仙。笑ひやまずウヌ手はみ

を立てこそ

いちのたにふたばぐんき

一谷嫩軍記

〔解説〕宝暦元年（一七五二）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したものである。三段目までは並木宗輔が書いたものの、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

〔二〕までのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「二枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆき、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰ります。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行きます。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよっていました。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようしますが、靡かぬのに腹を立てて、姫を刀で刺してしまいます。

〔組討の段〕一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせますが、熊谷が勝負を挑んで呼び止めます。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷きます。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけますが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼みます。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、敦盛を逃がそうとしますが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討ち落とします。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶えます。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのです。

〔脇ヶ浜宝引の段〕 石屋の弥陀六は、石塔の建立を依頼した若衆と共に石塔の前にやってきましたが、若衆は急に姿を消します。通りすがりの百姓たちと弥陀六、娘の小雪が訝しがっているところに、敦盛の母・藤の方が源氏方に追われてやってきました。藤の方は、小雪が若衆に貰った笛を見て、敦盛のものではないかと問いただします。百姓たちは敦盛と熊谷の戦いの様子を語り、敦盛が討たれたことを知った藤の方は泣き伏します。先ほどの若衆は敦盛の幽霊であったのかと皆が話しているところに、追っ手が現れ、藤の方を渡せと迫ります。百姓たちが抵抗し藤の方を逃がしますが、思わず追っ手のひとりを殴り殺してしまいます。庄屋がやってきて死骸をあらため、傷がないことから誰も殺してはいないという説明をしに行く役を皆で押し付け合い、結局くじ引きで決めることにします。

組討の段

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば乗り後れじと、汀みざわに打寄れば、御座船ござふねも兵船も、遙かにのび給ふ。無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば詮せんかた方波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かりけるところに後より、熊谷次郎直実「ヲ、イ〜」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大將軍と見奉る。正まひなうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せん返させ給へ」

と、扇を上げて指招き

「暫し〜」

と呼ばはったり。敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きかざし、朝日に輝く劍つるぎの稲妻かけ寄り、かけ寄せちやう〜、蝶の羽がへし諸もろ燈あかり、駒の足並かつしかつし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〜。群れゐる千鳥村千鳥むら〜ぱっと、引汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も果てしあらざれば

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむずと

組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽を顕はし給へ。又今生こんじょうに何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

と懇ねんじろに申すにぞ。敦盛御声爽かに

「フ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前しやうぜんの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我

が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛はつしの末子、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしき。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う〜」

といひ捨てゝ立別れんとするところに、後の山より武者所、数多あまたの軍兵

「ヤア〜熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、熊谷ははつとばかり、『いかゞはせん』と默然もくねんたり。敦盛卿しとやかに

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が

手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給へば、いたはしなから熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利劍と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様な御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く氣後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ

「ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「悴小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きたるさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝで討ち奉らば、嘸や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ごこされて」と、さしにも猛き武士も、そゞろ涙にくれぬたる

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招け

とはこの事。早首討つてなき後の回向を頼む、さもなくば生害せん」

とすゝめられ

「ア、是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。袈ほろをほどいて敦盛の御死骸を

押包み、総角取あけまきつて引き結び、手綱を手繰り結び付け

る。鞍の塩手やしをしをと。弓手ゆんでに御首携へて、右に

轡だんごくせんの哀れげに、檀特山のうき別れ、悉陀しつた太子を送りた

る、車しやく懸童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙なが

らに（帰りけり。）

脇ヶ浜宝引の段

は漆喰しっくく

と、懐より蓋物取出し、重ねの際きわぎわ々コウテコテと

塗るところへ、山畑かせぐ百姓ども、鋤すきくわかたげて、

ドイヤドヤドンヤドヤク

「ヲ、太郎兵衛かいの早いの」

「ヲ、今朝は又朝霧で夜明が分らぬわいの」

コツカコーコ

「ア鳥が鳴いた夜明ぢやイ」

ドイヤドヤクド、ンヤドヤク

「ヲ、与次郎危いぞ、そこらに崖ちよがあるぞよ」

「ヲットチヨヤばいとこな」

ドイヤドヤクド、ンヤドヤク

「ヲ、何ぢや向ふに光る物が見えるなう」

「ヲ、見えるク。アリヤ何ぢやあらうな」

「アリヤ人魂ぢやい」

行く空の、月もさやけき夜の道、御影の里を立出で

て、四方よもの景色もすみのぼる、高根に響く、布引ぬのびきの、

滝みなとがわの白糸湊川、流れも切利天上寺。摩耶まやのお山を

右手めてに見て、気も磯伝ひ須磨の浦、一の谷にぞ、着き

にける。東雲しのめ近き、横雲にたなびく空も青々と、枝葉

しげりし松蔭にすつくり立つたる五輪の石塔。遠目に

それと弥陀みだろく六が、走り寄つて

「ヲ、これぢやク。先達て遣はされた所書に合せ、

若い者等に言付けて、建ては建てたが、アちつくり笠

にふりがある」

と押直してためつすがめつ

「サアお若衆様、恰好見て下さりませ。なんとよごこさ

りませうがや。これから狂ひの出ぬやうにとめを合す

「アイヤ／＼赤玉ぢやい。赤うて丸いわい」

「エ、何いふぞい。アリヤおまへ、石屋の親仁の頭ぢやないかい」

「ヲホンニひよこ／＼いごくわ」

「呼んで見やんせ／＼」

「ヲ、イ親仁どんかいの」

「ヲ、イ、石屋の親仁どんかいの」

「ヲ、イ親仁どんの石屋かいの」

「ヲ、イ、ヲ、ホ石屋の親仁どんかいの」

「ヲ、イヤイ。こりや皆とうから精が出るな」

「イヤこちとらよりこなたとうから、あぢな所へ石塔をシャッキリコと建てさしやつたなう」

「ハテあの人は商売ぢやによつて、どこであらうが持ち運んで建てねばならぬ。ガ誂へ人が希有なやつぢやないかいナウ親仁どん」

「ア、コレ／＼むさと僮相いふまい。その施主人がこ

こにござるぞ。ナア申しお若様衆。我も人も亡者のため、卒都婆一枚立てても三悪道を通ると言ふ。まして大層なこの石塔をお建てなさるるは、御奇特なお若様衆。結構なお志でござります」

「イヤコレ親仁どん。お若衆の施主人のと人もないにソリヤ何いはしやる」

「なんとはわいらアまだ目が覚めぬな」

「アレまたどこに人がゐるぞいなう」

「ハテコレここにぢやわい。ヲ、／＼ほんに見えぬわハテナ。たつた今迄ここにであつた。ハアどつちへござつたな。お若衆様／＼」

と呼べば、共々百姓ども

「そこか」

「ここか」

と尋ぬる所へ、娘の小雪がかちはだし息もすたく走
り着き

「ア、コレ、父様、お若衆様にした一言いひたい
事があつて来た。ちよつと逢はして下さんせいなア」
「イヤ逢はしてどころぢやないわいの。影も形も見え
ぬわいの」

「ヤコレ親仁どん、お若衆がゐやらねば、忽ちこなた
の損ぢやぞや、所を知つてゐやんすか」

「但し手附でも取つて置かしやつたか」

「イヤテヤ仁じんたい体がよいから所も問わず、一錢も取らな
んだ」

「ハ、アそれでよめた。石塔をかこつけに、何ぞせし
める悪工。さては騙かたまりに極つた。遠くはうせまいぼつ
かけん。サア皆来い~~~~~」

と立騒げば

「ア、コレ、待たしやんせ。よもやそんなさもない
心なお方ではあるまい。その証拠はわしにやるとてコ
レこの笛を」

「エ、何ぢやド、ア、アコレこの笛を貰ろたんか
え。ハハアコリヤマア袋は結構な赤金あかきん欄ぢや。さて笛
は生竹なまたけでもないが、アコレ見や節からちつくり枝葉が
ある。何にもせよむつかしい代物しろものぢや」

「ヲ、むつかしい事ならお庄屋様へ往て尋ねて来い。
この間大阪からやくわんといふ物持つて来て見せた
ら、コリヤ兜かぶとぢやといやはつた。この手見るやうな
物は頤おとこがへ引掛けるのぢやて。又口見るやうな者は兜
の角つのぢやて。片つぽないのは昼寝の時勝手がよいやう
にしてあるのぢやて。なんでやくわんといひますとい
うたら、軍場いくばで敵の矢が当たるとくわんと鳴るて、そ
れで矢くわんぢやといはしやつた。ぢやに依つてこの

笛もお庄屋様へ往て尋ねたら知れるぢやあらうかい」

「アさてよいわいの。石塔を只した代りに置いて去んだ笛なりや、それが誠のあをたの笛ぢや。エ、こんなことならあたまで半銭取て置いたら、まんざらの損もせまいにア、あた惨たらしい目にあうた」

と、悔むにかひもあら笑止や。弥陀六がぬかれたと伝へて諸事の詭物、手附を取るといふことはコレの時よりと知られたり。時しも後の松原より、足早やに來る女は何者なるぞといふ内に、走り近付く藤の局「コレ、ちよつと物問はう。船寺はどつちぢやの。教えてたべ」

とありければ

「ヲ、それはこれからよつほど遠い。ガ見れば賤しうない女中、何故寺へ行かつしやる」

「されば、様子あつて妾は跡より追手のかかる者」

暫く影を隠さんため」

と宣ふ中に目早くも、娘が持つたる袋を見付け

「ナウそれちよつと見せてたべ」

と手に取り給へば紛ひなき、青葉の一管

「ヤアこれはわが子の敦盛が、肌身放さぬ秘蔵の笛マどうしてこなたの手にある」

と、聞いて親子も不審顔。百姓どもは口々に

「ヲ、その敦盛といふ人は、この間の戦ひ源氏の侍ヲイ名は何とやらいうたの」

「ヲ、なんでも黒い繩ぢや」

「ム、黒い繩なら墨繩か」

「イヤ、」

「わらび繩か」

「イヤ、黒うて丸い」

「ア炭団か」

「ヲ、なんでも拳の中にある名ぢや」

「ヲ、そんなら一拳いかうかい」

「ヲ薩摩でいこで、ヤヒイフウリう」

「ちえい」

「たま」

「ヲ、たま／＼。その玉織たまおりといふ内裏上臈だいりじょうろうも殺され

てゐたげな」

と、聞いて御台は

「ヤア／＼なに敦盛は討れしとやハア。福原の館にて、

母様御無事でおさらばと、玉織諸共いさぎよう、いう

たがこの世の暇いと乞ひ。長い別れになつたか」

と、ありし事どもくどき立て、人目も恥ぢぬ叫び泣き、

前後不覚に見えにける

「イヤコレ親仁どん。合点のいかぬ事があるわいの。

死なしやつた敦盛様があの笛の主ならば、こなたに石

塔誂へたお若衆と一つぢやないかの」

「ヲ、いかにも」

「サその死んだ人が来さうなものぢやないぞや」

「ヲいかにも」

「聞えたさつきにここ迄連立つて来たのは」

「いかにも」

「搔き消すやうに見えなんだは」

「いかにも」

「どろひゆうぢやあるまいかの」

「いかにも」

「エ、どうぢやぞいの」

「いかにも」

「エいかにも／＼とばかりいうて判るかい蛸はどう

ぢやい」

「齒に合ぬわい」

「ヤなに馬鹿な」

「へいそりや着いたしましたことは着いたしましたけれど、おまへさんがあんまり着々々々いうてござる間に、モウ二三里も向うへ着いたしましたでござりませう。追手の衆なら一足も早うござれ」と急かすれば

「さてこそ遁すな皆来い」

と駈出すふりにて立留り、運平が耳に口

「ゴシヤ〜〜〜」

「ボチャ〜〜〜」

「ナウン〜〜」

「ウン〜〜〜」

牒し合して木蔭に残し浜辺をさして駈り行く。跡打眺め

「サア楽ぢや。この間に早う」

と御台を出し

「コリヤ〜娘。あなた一人は覺束ない。寺迄送つて内へ往ね。ちやつと〜」

といふところへ、思ひがけなく木蔭より、須股運平蛙の真似してポイ〜ポイ〜〜〜ポ、ラノポイトコナと飛んで出ずに逼うて出で

「ヤアどこへ〜。かうもあるかと推量し、忠太が我を残しおかれた。御台をこつちへ渡さばよし、いやぢやなんぞとぢくねると、大もすらり、小もすらりと抜き放し、ヤ丁ンヤ丁ンキリ〜〜ンヤ丁ン〜と手打切り、そつ首ころりと打落す。なんと〜」

と罵れば、百姓どもはあひる笑ひ

「イヒ、〜、〜。コラヤイ、そつ首のそつくひのと、わいらがほでの動く間に、目をすつて鼻かんで爪の掃除してゐよかい」

「ヲ、さうぢや〜。なんのうっかりとしてゐようかいやい。サア、相手仕事ぢや手早やに來い」

と、てん手に鋤鍬大熊手、打ってかかれれば、運平始め、数多の家來も一同に、拔連れ〜、渡り合ふ。打合ふ際に弥陀六が

「ソレ御台様逃げたく〜。娘も逃げよ」

とあせる中、元より達者の百姓ども、腕先揃へて連架歌、『ヤア寝たや寝むたやホイ〜、寝た夜はよ

からさわうた

うからうの、バツタバタ、バツタバタ』とかたはし家來を打殴り、運平を追取捲き、投げたり、踏んだり、蹴飛ばしたり、つめったり、かんだり、こそぐったり、かいたり、なめったり、ひねったり、ついたり、ゆさくったり、引っぱったり、寄ってかかって打叩く。急所にや当りけん、『うん』ともなんともいはずに白眼をぐつとむいて死してんけり

「ソリヤ死んだわ」

と逃行く家來。又追つかくるを、弥陀六が

「コレ〜待った」

と呼返し

「エ、御台の難儀を救ふためぼつ散らすばかりでよいに。ア、死んだりや尻がむつかしい。サア皆、ござれ」といふところへ、駈って来る庄屋の孫作。死骸を見付けて

「サテこそこそサテ。アコリヤ〜雀忠、びしゃ五、

のどたん

よ

どもまた

いしみだ

ちゃ

ごろ

つり

咽丹、齒ぬけ与、吃又、石弥陀、茶わん五郎、釣いぼ、

そんなら総そうしめじゅうべ十。一人も散らすことならぬぞよ。コレ皆よう聞かあれ。今梶原様の郎党番場忠太といふお侍様がござつて、百姓どもが狼藉し家來運平を殺したる由憎い奴。残らず引立て来るべしと厳しい言付け、ア、ひよんなことしておららに迄厄介かける。遅なっ

たらなほ怖い。サア〜おぢや〜」

といふに皆々尻込みの、中に弥陀六進み寄り

「イヤ申しお庄屋様。殺したと聞かしゃつたは大きな間違ひ。アリヤ目が眩もうて死んだのだぢや。その証拠には死骸に一つも疵がない」

「ム、それが定じようならおららも嬉しい。ガ一遍骸からだを改めて見やうかい。ヲドレ〜」

と眼鏡取出し、しつかと掛け

「ハテ怪しやいぶかしやなア。今この目鏡を掛けるや否、四方八方真暗闇となつたるは、正しくこれは変化の所為か。なににもせよ稀代の不思議をサマ見ることぢやよな」

「ワイ庄屋どん暗い筈ぢや。目鏡鞆口ぢやがなアハ、、、」

「ワイコリヤえらい僞相した。わいらがあまりあはて

るさかいぢや」

「エ、何をいうてんね。おまへがあはててゐるんぢやがな」

「ム、マ、、、よいわい何分裸にせにや分らぬわい」

「ヲ、さうぢや〜」

「ホ、ヲ屈強な男ぢやの、ホンニどこも疵はないわい。ヨウ〜首がないわい首が」

「アハ、、、庄屋どん。ソリヤおまへ逆様ぢやがな」

「ム、逆様かヲ、ホンニここが頭ぢや。ア目鼻口えらい髭男ぢや。腹、臍へそ、ヲ、待てよ。ヤこいつ受臍ぢや。

親に孝行であつたか、マ、、、片身はよいわひつくり返して見い。ム、首筋ちり毛、アゆがんであるは小さい無理いうて据ゑられたんぢやなアハ、、、。ヨウ〜ヨウ〜えらいところに鉄砲疵」

「ワイ庄屋どん。ソリヤおまへ尻の穴ぢやわいの」

「ヲ、コリヤけつ穴か、太いけつ穴ぢやな。犬にしたら強からう」

「庄屋どんそんな所改めいでもよいぢやないかいの」

「インヤ〜これが大事の尻仕舞ひぢやぞ」

「その杖でせせつてみい」

「ワアハ、煙が出た」

「エ、庄屋どん、そりや尻じゃがな、きたないがな

〜

「ア、コリヤ〜屁は何も汚いものぢやない」

小高き石に腰打ちかけ扇手にふれ大音声

「エ、尾籠ながら、屁と申せども文字に書けば平と

云う字、根をただせば菩薩のアクビ、げに誠神に御幣

あり、まった今目前へい国元年へのへの年、ポンプ

の大将九郎へい官義経公、クサシ坊ヘンケイと、へよ

どり越にて平家をへめる。平家の大将へよ盛はへの病

ひ、すかべの六弥太はサツマイモ忠度をむし取り土佐

坊昌俊は尻馬よりすべり落ち、ヘン太は佐々木と宇

治川の先陣を争い、又雁金文七、安の平兵衛は男立に

てへんくわを好み、古きへたはへたなりにかたまり、

蛇の道はへびが教へ、へは身を助ける、不仕合せな運

平が最後屁は、是即ちケツ定往生、人は平生屁さへこ

けば、尻のほこりがとれてすつぱりアナカシコ〜」

「お庄屋どん、引導ごくろう〜」

「ム、アア〜疵がなうて目出たい〜。なんにも怖

いことはありやせんわ。この中でよう物いふ者がたつ

た一人往て、さつぱりと言訳しいさへすりや済むこと

ぢや」

「ヲ、ほんにさうぢやの。誰がよからうの。」

「ム、待て〜。イヤコレ年の功ぢや弥陀六こなたい

かあれ」

「イヤ行く分は構はぬが南無阿弥陀仏。おりや口癖の南無阿弥陀仏。念仏が邪魔になつて南無阿弥陀仏、どうもならぬで南無阿弥陀仏／＼／＼」

「アえらい難儀ぢやの。そんなら雀の忠吉やらうかい」

「イヤモわしやあんまり口早やで、茶々苦茶／＼いふ

ことが皆無茶苦茶になつてどうもならん。こればかり

は堪忍しとうくれ／＼／＼チュ／＼／＼ブル」

「エ、喧やかましいわい。さては咽の丹兵衛かい」

「イヤわしやもうこの通り咽がゴロ／＼いうてどう

もなりませんぢやヲホ、／＼」

「ヲ、そんなら歯抜の与次郎やらうかい」

「ム、おれがやうな歯抜が往てオネ／＼いうたと

てなんにも分りやせんわい」

「ム、そんなら吃又やるかい」

「イヤモわしや吃りますわい。この儀はお断り申します」

「さてはびしやのぐ太右衛門かい」

「庄屋どん。おりや若い時ひえを患うて、声が鼻へ抜けて物いうても先へ通じませんぢや。こればかりは御免蒙りたいといふもんぢや」

「ハテさてそのやうに譲合うてては埒が明かんぢやないかい。ヲ、幸ひここに石を運んだ繩がある。いや応いはさぬ鬮くじ取り勝負。この庄屋がしてくれる」

と、手早やに繩切り、後で、モツチャラクツチャラ引結び

「サア／＼／＼結んだを取った者が行くのぢやぞ。サアサア／＼鬮引ぢや皆つかまへ／＼。ハア頭数よんでしたがコリヤ一筋余ったわ」

「ハテそりや親の縄ぢや。あまりもんに福がある。庄

屋どんとらしやれ」

「フ、ほんにさうぢやそんならおれが取ろ。サア〜

皆引いてくれ〜〜」

「サアえゝか引け〜〜〜」

「ヤーイニフ三ツでよい〜〜よいやナ」

「すつとせい」

「ハア悲しや結んだのはおららに當つた」

「ア、サア〜サア庄屋どん往かあれ〜」

「イヤ待てよおりやなんにもいかう筈がない」

「デモ鬮に當つてあるがな」

「エ、そんなら今一遍仕直しぢや」

「エ、そんな穢いこといはんすないの。おまへが言出

したんぢやがな。おいらのやうな百姓になつて往て、

言訳して下さんせ」

「サ、〜、お頼み申します〜〜お頼み申しま

つせ」

と引立てられ

「我は幸ひ百姓どもの、畑姿をわが姿」

と、鍬打担げ立上りしが、かねて弱気のお庄屋が歎き

「ア、〜、これ申し、お気の毒な」

とばかりにてなんのくもなく行く親仁。言訳心ぞいち

らしき。皆々遁れこそ〜と逃げ行く足もちよこ〜

走り、鬮に當りて一人行く心の、中こそ、をかしけれ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。